

草津市立矢倉小学校通信 令和3年2月15日 NO.21



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

言うことを聞かせる ～これだけ言ってるのに、できないのはどうして?～

同じことを子どもに伝えるのでも、どうも私たち大人は相手の心持ちを想像せずに、用件だけを言葉にしてしまいやすい。相手が子どもだからだろうか…。

若い頃、子どもへの語りかけが用件だけになっていたと、気づかされるできごとがあった。けんかをしてきた子どもたちへのいわゆる説教である。日ごろは、仲がよい友だち同士なのに、ちょっとした言い合いがエスカレートしてしまい、その日は取っ組み合いのけんかとなった。先輩の先生と二人がかりで、なんとか引き離し、手分けをして話を聞いてやろうということになった。当時の私は、とにかくけんかの仲裁は、「手を出す方が悪い」「手は決して出してはいけない」このことを第一に、子どもに言い聞かせるようにしていた。こうして、一通り、こちらの言い分をしゃべりつづけ、これ以上、話すこともなくなれば、「わかったか?」と念を押して終わるのを常としていた。もちろん、そのときも同様に、私が引き受けた子は、ほとんどだまりこくっていたものだから、私は私でよく聞いてくれたと都合よく片づけた。が、となりの部屋では、先輩の先生がまだ子どもと何やら話をしているのである。のぞいてみると、さっきまで鼻息荒くけんかをしていた子がぼろぼろ涙をこぼし、自分がどういう気持ちで立ち向かっていったのかを語っているのである。先輩の先生はというと、ほとんどあいづちをうつだけで、「そうか、そうか…。」「それで、どう思った?」と子どもの言い分を語らせ、気になるところはつつこんで尋ねていく。一通り、話を聞いたあとは、「これからどうするつもり?」「それでいいのかな?」「できそうか?」などと覚悟を決めさせていく。私のように語気を強めて、なんとか思い知らせてやろうとするのでは決してない。自分の語りかけはひよっとするとこちらのストレス発散なのではないかと、なんとも情けなく思えてきた。先輩のそれは、しみじみと語り合っていく中で、当の子どもにこれではいけないと気づかせていくものだったのである。

そういえば、私が子どもだった頃の、叱られた思い出は「怖さ」しか残っていない。何がどのようにダメだったのか、さっぱり覚えていない。ところが、一言ぽつんと語られた言葉、「いつものおまえとちがうな、きれいや、かなしいな。」「お母さんは、そんなのいやや。」「それでいいのかなあ。」「誰も見てなくて、知らなくても、神さまはちゃんとみていてくださるから…。」そんな言葉の響きは、今も心に刺さっている。こうした言葉がきっかけで、やっぱりこれでよかったんだ、とか、もうやめよう、少しでもいい子になろうなどと、心の中で自分自身と話をし、約束をした覚えがある。

自身の思いを語るということには、ものごとのありさま、そこに織り込まれた自分や相手の心を言葉でかたどっていくことにほかならない。そうして、お互いの心がどのようなものか見定めたり、つくろったりしていくのである。子どもに言って聞かせることができるのは、子どもが自身を見つめ、自分の生き方に気づいていく営みの上に成り立つものと言っていいだろう。